

25 あらためて猪苓湯の有効性を実感した

2 症例

クリニックサンセール清里

岡村 武彦

猪苓湯は、あらゆる証に対して処方できる泌尿器科では代表的な漢方薬の一つである。尿路結石・尿路感染などはもちろんのこと、排尿に関する症状を改善するとされ、漢方に精通していない医師も含めて、広く使用されている。演者も以前より漢方薬は少なからず処方していた。猪苓湯は使いやすく、尿路結石や、過活動膀胱、慢性膀胱炎などに多く使用してきた。現在、定年後近くのクリニックに勤務し、泌尿器科を主体に診療を行っているが、猪苓湯が著効した症例を続けて経験した。あらためて猪苓湯の有効性を実感した2症例を報告する。

症例1：84歳男性。2000年に主治医として前立腺肥大症に対してTURPを施行。術後尿道狭窄となり、内視鏡的切開術を施行している。排尿状態は改善したもののその後も頻尿などの症状があり、抗コリン薬を継続処方していた。10年後、他院の整形外科で腰椎の手術を受けた。術後バルーンカテーテルを一時的に留置され、抜去後に尿道狭窄となり、同院で内視鏡的切開術を施行。退院後に頻尿と尿貯留時の痛みが強く、予約外で受診した。内視鏡で膀胱容量も少なく、粘膜全体からのさみだれ様出血を認め、間質性膀胱炎と診断。膀胱水圧療法で症状は軽快したが、再燃で2年間の間に合計3回の水圧療法を行った。その後心血管系イベントで某大学での治療を行い、水圧療法も難しくなり、ロキソプロフェンや ترامセツトなどで対症療法を行っていた。通院中の大学にボツリヌストキシン膀胱内注入などについても依頼したが、合併症が多く、難しいとのことであった。そこで猪苓湯を試してみたところ、劇的に症状が軽減。その半年後、内服も多いことから頓用に変更。現在症状が出たときのみの頓用に切り替えて1年以上経過している。

症例2：73歳男性。2012年に左腎盂癌と診断され、左腎尿管全摘術を施行。半年後に右腎盂癌も指摘され、全尿路全摘+透析を提案されたが拒否。当時の主治医に勧められ、放射線治療+温熱療法・低用量抗がん剤治療を選択。右腎盂癌はこの治療でCRとなったが、4年後膀胱内再発でTURBT施行。病理結果はG3pT1で抗がん剤膀胱内注入を合計20回施行した。この間、膀胱刺激症状が強く、鎮痛剤を継続して服用していた。その3年後、前立腺部尿道に再発あり、TUR施行後BCG膀胱内注入を8回施行。この治療中から極度の頻尿と膀胱刺激症状で鎮痛剤、抗コリン剤、ステロイドなどを投与されたが、改善せず当院に紹介受診。その時点でカロナールとユリーフが処方されていた。ベオーバと猪苓湯を追加処方。2週間後に受診した時点で劇的に症状が改善しており、時々内服を忘れるほどであった。